
雪解けを待つ

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪解けを待つ

【Nコード】

N6698D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

「綺麗だね」 白く息を吐く横顔と、世界でばくにしか聞こえていないその声が、まだ頭に残っている。

昨日の夜遅くに降り始めた雪は、朝にはすっかり積もっていた。
「綺麗だね」

白く息を吐く横顔と、世界でばくにしか聞こえていないその声が、
まだ頭に残っている。

台所から聞こえる物音に目を覚ます。いつもなら朝一番にぼくが
スイッチを入れるガスストーブはすでに稼動していて、室内は暖か
った。

枕元にあるはずのケータイがなかった。

視力0.1以下を誇る両目を細めて、周囲に目を凝らす。ケータ
イはベッドの下に転がっていた。

ケータイ開いて時間をチェック——a m 9:22。

ベッドからそもそも抜け出して、丸テーブルのメガネを拾い上げ
た。寝ぼけた頭と、鮮明になる視界。

ハンガーに掛かったブラウンのコートと、赤茶色のワニ皮を模し
たカバン。

台所で、まな板を叩く音が止んだ。

「おう、起きてたかい」

「おはよう」

「おはよ」

明るく染めたセミロングを揺らして笑った彼女は、止めていた手を再び動かした。

「外、もう真っ白だよ。昨日のうちに降ってたみたいで。ここ来るまでに何度足を滑らしたか」

「転ばなかった？」

「奇跡的に転倒ゼロ」

「変なところで器用だね」

「ほめてんの？ けなしてんの？——ってこらこら」
「うん？」

テーブルを前に座ったばかりに、彼女の指がビシッと突き付けられる。

「あたしがいる時は全席禁煙です」

啜えたタバコがお気に召さなかったらしい。

「へい」

「吸うなら外で吸う！」

「へい」

朝からテンション高いなあと思いつつ、ベランダへのドアを開けて、閉じた。

「あの、メイちゃんさん」

「何？ いくくんさん」

「外、白いんですけど」

「雪、積もってますもん」

「むっちゃ寒いんですけど」

「じゃあタバコ吸わないでください」

「ちよつとだけ」

「ダメです」

「ほんと、ちょっとだけ」

「ダメです」

「先っちょだけでも」

「ダメです」

船長！ 取り付く島もありません！

「かわいく言ってくれたら許す」

「おねがい」

「キモいから却下」

「ばっさああ！」

「うぎゃああ！」

ぼくの健闘は袈裟懸けに切り落とされた。

「彼氏にキモいって……」

「タバコ吸わなきゃいいだけじゃん」

すっぱり言い置いて調理を続ける彼女。

うーむ、譲る気はゼロか。

「……行ってきたーす」

「生きて帰っておいで」

腹いせに彼女のブラウンのコートを羽織って、灰皿片手にベラン
ダへ。

くそう、むちゃくちゃ寒いじゃねーか。

駅から歩いて5分。7階建てマンションの3階から見下ろす街並
はずっと向こうまで白く染まっていて、未だサラサラと雪が舞って
いた。

昨晩から降り始めた雪は、街を純白に彩っています。

紫煙も吐息も平等に白くなる。

街は静かで、眼下を走るバスのタイヤチェーンがアスファルトを
引っ掻く音だけ、甲高く響いた。

後に残るは無音。

「綺麗だね」

舞い落ちる雪を仰ぎ見るその横顔は、まだはつきりと憶えている。
日付変更線を全力で飛び越えた深夜。

こうして積もっている雪の、最初と一緒に眺めた横顔。

「終わりにしよう？」

言葉を紡いだ微笑は美しく、ぼくから思考を奪った。

「もうこれ以上は続けられないよ。だから、終わりにしよう」

いやだ——ため息のように呟いて、恋した横顔を抱き締める。

離れたくない。

放したくない。

そばにいてよ。

そばにいたい。

「……うん」

先走った思考は幻のまま、ぼくの首は縦に揺れた。

「——生きてる？」

突然ベランダに顔を出した彼女は、ぼくの羽織っているコートを

見るなり目を三角にした。

「ちよつと！ 何着てんの！ 自分の着りやいいじゃん！」

「ロングコートだから丈はいいんだけど、袖が短いよね、これ」

「体のサイズが違うんだから当たり前でしょ！ ありえない！ 匂い付いたらどうすんの！」

コートを剥ぎ取るうと躍起になる彼女を、ぼくの腕は絡み取る。引き寄せる。抱き寄せる。

ぼくの体重を少し乗せて、抱き締める。

雪がひらり舞い落ちるのが横目で見えて。

彼女の手が、ぼくの後頭部を撫でた。

「ねえ」

「へい」

「寒いからコート返しなさい」

「後でね」

「風邪ひかせるつもりか」

「看病したげる」

「できんの？」

「……お粥くらいなら作れる……かも」

しばらくでゆく自信。腕の中で、彼女の微笑がこすれた。

「今度、作り方教えたげる」

「お願いします」

「いいかげん、そろそろ入らないと本当に風邪ひくよ？」

身じろぐ体を一層強く抱き締めた。

「好きです」

「ん」

「大好きです」

言葉を、吐く。

「一緒にいます。幸せにします。話を聞きます。文句も聞きます。愚痴だつて聞きます。歩調も合わせます。買ひ物も付き合っし、美味しい店見つけたら誘います。オハヨウも言うしオヤスミも言うし、

その日感じたこととか友達と話したこと、ちょっと頭に來たこととか、全部言います」

「タバコは？」

「やめる……よう、努力します」

彼女の失笑を買った。

「愛してます」

「うん、わかった」

ゆっくりと、彼女が腕をほどく。

触れるようにキスをして、ドアを開けた。

「部屋、戻ろう？」

「……うん」

「あと、勝手にコート着ない」

「……はい」

ぼくの街に雪が降る。

彼女の作ってくれた朝ご飯は美味しくて、ちよつと泣きそうになったのは、たぶんそのせいじゃないのかもしれないけれど。

積もった雪が全部解けて、またいつもの風景に戻る頃には、もう大丈夫だと思うんだ。

大丈夫だと、思うんだよ。

さよなら、恋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6698d/>

雪解けを待つ

2010年10月8日15時10分発行